資　料

幼児・児童における他者感情理解能力と感情的視点取得能力に関する研究のレビュー
―両者の相違についての検討―

本間　優子[1)]・内山伊知郎[2)]
1）新潟青陵大学看護福祉心理学部福祉心理学科
2）同志社大学心理学部

The Review of the Research on the Emotion Understanding Ability and Emotional Role-Taking Ability of Children :
Examination about a Both Difference

Yuko Honma[1)], Ichiro Uchiyama[2)]
1）NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY
2）DOSHISHA UNIVERSITY DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY

キーワード
他者感情理解能力、感情的視点取得能力、概念、幼児・児童

Key words
emotion understanding ability, emotional role- taking ability, concept, children

Ⅰ　はじめに

1．問題と目的

学級崩壊やいじめなど、子どもの行動上の問題は長年取り上げられており、小・中学校における暴力発生件数は、平成20年度、調査開始以降最も多かったことが報告されている[1)]。暴力行動といった問題行動の背景には、適切に自分の気持ちを表現したり、統制することへの困難さがうかがえる。また、いじめの背景には、他者の立場に立ち、相手の気持ちを思いやることのできる能力の欠如が予想される。社会的、教育的に重要なこのテーマに関して、心理学の中では向社会的行動の問題として多くの研究がなされてきた。中でも向社会的行動の先行要因として、役割（視点）取得能力は長年注目されている[2)]。

役割（視点）取得能力は知覚的視点取得、感情的視点取得、認知的・概念的視点取得の３つ[3)]、さらに社会的視点取得[4)]の４つに分類される。

知覚的視点取得とは、対象を他者の視点から見たときに、自己の視点のみならず、他者の視点から見た知覚（visual perception）を理解できる能力であり、古くはPiaget＆Inhelder[5)]の３つ山課題が代表的なものであり、Flavell[6)]らにより、Piaget＆Inhelder[5)]が対象にした年齢（４歳～12歳児）よりも低い３歳児において、visual perceptionの知識に水準１（他視点から何が見えるかに関する知識）と、水準２（他視点からどのように見えるかに関する知識）の２つの発達水準があることが明らかにされている。

感情的視点取得能力とは、「他者の感情を正しく読み取る能力」であり、他者の感情を推測する能力を問題にしており、Borke[7) 8)]の

対人知覚テストが広く用いられている[9]。一例を挙げると、かわいがっていたペットがいなくなったこどもに関する短い物語を読み聞かせられたあと、主人公の絵が示されるが、表情が描かれておらず、顔部分に適切な表情を描くように求められる[7)8)]。Chandler&Greenspan[10]は、役割（視点）取得能力とは、他者の感情が自分のものと異なっている場合でもそれを推論できる能力であるので、Borke[7)8)]の課題は、単にある状況でどの人がどんな感情を持つかを推論しているだけで、真に役割（視点）取得を行っていないと批判しているが、Garnerら[11)12)]など、Borke[7)8)]のパラダイムを用いることで感情的視点取得能力を測定しているとする研究もあり、研究者間で見解は一致していない。

認知的・概念的視点取得とは、他者の立場から他者の意図や考えを理解する能力であり、古くはFlavellら[13]の課題がある。Flavellら[13]の課題では５セントと書かれた箱と、10セントと書かれた箱が用意され、それぞれに５セントニッケル貨と10セント銀貨を入れておく。被験者の子どもはもう１人の子どもとゲームをしてもらうといわれる。そのゲームとは、一方の子どもがどちらかの箱の中のお金を取り除いておき、相手の子は１つの箱を選択して、その中にお金が入っていればそれをもらえるというものである。被験者はお金を取り除く側になるのだが、そのときに相手の子どもにお金をとられないようにするには、どうしたらよいかということを質問される。ここで、被験者が相手の考えをどこまで推論できるかが検討される。近年では、誤信念課題である、サリーとアン課題と同じパラダイムを用いて、検討が行われている[14)15)]。

社会的視点取得能力とは、相手の気持ちを推測し、理解する能力であり、対人関係に生じた葛藤の解決や道徳的判断を行う前提となる能力である[4]。感情的視点取得能力との相違点としては、他者の立場に立って心情を推し量り、自分の考えや気持ちと同等に、他者の考えや気持ちを受け入れ、調整し、対人交渉に生かす能力[16]という点である。社会的視点取得能力は、Selman[4]が木のぼり課題によりその発達段階を明らかにしているが、日本でもSelman[4]の木のぼり課題に基づき、荒木[17]が開発した木のぼり課題によってその発達段階が測定されている。

役割（視点）取得能力と関連する向社会的能力として、他者感情解釈能力が伊藤[18]により示されている。伊藤[18]は、役割（視点）取得能力を「他者の視点を認知的に理解し推測する一般的能力」と定義し、他者感情解釈能力が向社会的判断や向社会的行動と関連があると述べ、他者感情解釈能力は役割取得能力の下位要素と定義している。幼児を対象とした実験の結果、矛盾した（悲しい場面で微笑みの表情）場面でも他者の感情を適切に推測できること（この場合、悲しい顔を選択）が向社会的行動につながるという知見を示した[18]。しかし、伊藤[18]が、他者感情解釈能力として用いた課題は、ビデオにより物語を提示し、物語の内容と一致、または矛盾した表情を示す主人公の感情を適切に推測できるかどうかについてを測定しており、Borke[7)8)]と類似したパラダイムである。特に、矛盾した表情を示す主人公の正しい感情の推測については、主人公の立場に立って感情の推論を行う課題であることから、感情的視点取得能力を測定する課題であると考えられる。このことから、伊藤[18]の定義する役割（視点）取得能力（他者の視点を認知的に理解し推測する一般的能力）の下位能力は、感情的視点取得能力となることを示唆する。しかし、研究者間で何を「他者感情理解（解釈、推測）能力」と定義し、測定するかが混在としており、伊藤[18]以外の研究でも、感情的視点能力を「他者感情理解（解釈、推測）能力」として定義、測定している研究が散見する。

そこで、これまで幼児期・児童期において

「他者感情理解能力」[19]としてなされてきた研究のレビューを行い、それがどのような定義、方法で測定されているか、その結果、感情的視点取得能力と同義であるのか、それとも区別し、測定することが適切であるのかについて考察することを本研究の目的とした。

２．方法

CiNiiを使用し、「感情理解」をキーワードに文献の検索を行い、ヒットした106件の研究についてレビューを行った。なお、本研究は通常の発達の幼児・児童を研究対象としているため、自閉症等、広汎性発達障害の幼児・児童を対象とした研究は除外した。さらに、抽出した論文に引用されていた論文で上記のキーワードにヒットせず抽出されなかったが、本研究の目的に一致する論文については、その論文の原文にあたった。

Ⅱ　他者感情理解能力について

１．表情認知能力と状況把握能力の発達

他者の感情を理解したり、推測する際に手掛かりとするものとして、その１つには他者が表出している表情がある。幼児を対象とした表情による感情の弁別課題については、渡辺・瀧口[20]が４種（喜び、悲しみ、驚き、怒り）の表情図を使用した実験を行っており、加齢により表情認知が進む傾向が見出されている。

しかし、日常的な場面では表情はなんらかの状況のもとで表出される場合が多く、状況次第で表情の意味が変化することがある。他者の表情をより深く理解するためには、表情認知能力だけではなく、状況手がかりから他者の感情を推測する能力（状況把握能力）も必要である[21]。なぜなら、例えば相手が背中を向けていて表情を読み取れない場合や、同じ表情であっても状況によって表情の意味が変わる場合があるからである[22]。朝生[23]は、表情認知だけでなく、幼児期後期になると他者の特性や社会的カテゴリー知識を利用して他者感情を推測できることを実験的に示している。朝生[23]の実験では、幼稚園、保育園の年少・年中・年長児各30名に対し、カブトムシが好きな子どもにカブトムシを見ると逃げる子どもの話を聞かせるなどし、自分とは特性の異なる子どもの行動や表情を説明させている。その結果から、４歳～５歳児では他者の特性は考慮にいれず、他者の置かれている状況情報のみを利用して感情推論するものが多く、６歳児になると、他者の置かれている状況情報と、その他者は「いつも～している」という、行動情報の両方を利用して感情推測するものが多くなることを明らかにした。朝生[23]は加齢に伴って利用する情報が変化するという質的な発達的な変化があると推論しており、さらに、主人公の行動が正しく理解、保持されていても、それを利用せずに、主人公の気持ちを自分と同じ気持ちであると推測してしまい、正しく理解できない者がいることも明らかにした。その原因として、自己と他者が同じ状況でも異なる感情をもちうることの認識の欠如、自己の感情統制の欠如などが考えられるとしている。

このように、他者感情理解能力について、表情認知能力だけでなく多様な情報の利用が幼児期の次に迎える児童期を通じて徐々に発達していく[24]。Gnepp & Chilamkurti[25]は、6～10歳児を対象に、行動特性を考慮した他者理解ができるかについて、実験を行った。実験では、架空の人物の特性を示唆する過去の行動を聞かせ、その人物の行動や感情を子どもに推測させている。その結果、ある状況に対して人がする行動や抱く感情は、その人のそれ以前の行動や特性と強く関連していることへの理解は６歳児でも見られたが、年齢が上がるにつれて理解が進み、10歳児ではほとんどの子どもが理解することができた。

笹屋[21]は、表情認知に関する能力を表情認知能力、状況把握に関する能力を状況認知能力

と定義し、幼児から大学生までを対象に、これらの能力について検討を行っている。被験者は４歳時、５歳児、小１、小３、小５、中１、大学生で、それぞれ男女各10名ずつであった。課題としては、１）表情手掛かり課題（写真のみを使用）、２）状況手がかり課題（VTR刺激の物語）、３）状況+表情手掛かり課題（VTR刺激+写真）の３種類を使用し、３）状況+表情手掛かり課題（VTR刺激+写真）では、物語に対して適切と考えられる表情が呈示される「一致課題」と、不適切と考えられる表情が呈示される「矛盾課題」の２種類の課題が設定された。

その結果、表情認知能力と状況把握能力は異なる発達曲線を示し、表情認知能力は４歳までにある程度の水準に達するが、状況把握能力については、５歳頃に急激な変化を見ることが示された。さらに、矛盾課題においては、表情を重視する段階から、状況を重視する段階に移行するが、先行研究であるGnepp[26]、久保[27]では、性差については検討していないものの、Gnepp[26]では12歳、久保[27]では７、８歳で統合できるようになると示されているのに対し、笹屋[21]では、ほとんど統合が可能になるのは女子の場合は小５（10、11歳）であり、男子の場合は中１（12、13歳）であることが示され、性差が認められた。その後、中１以降になると、男子も女子同様に両方の手かがりを統合的に用いるようになることが示された。笹屋[21]は用いた刺激の違いが関係していると考察しているが、一致および矛盾課題の理解項目における回答の反応潜時は男女に有意差がなかったことから、表情や状況から他者感情を理解する能力とは別に、矛盾した手掛かりを統合する能力が存在し、その能力の発達が男子より女子のほうが早いとも考察している。

笹屋[21]と類似した研究で、山田[22]は、児童期における表情および状況、その両方を手がかりとした他者感情理解能力について検討を行っている。被験者は小学１～６年生、大学生であり、喜び、悲しみ、怒りの３つの感情について、表情課題（表情認知能力：表情カードを使用）、状況課題（状況把握能力：４コマ漫画を使用）、一致課題（感情理解能力：４コマ漫画と物語に対して適切と考えられる表情カードを使用）について、それぞれの課題において、刺激中の主人公の感情状態をどの程度理解したのか、自由記述により回答を求めている。その結果、表情認知能力は学年とともに発達し、小学校中学年頃に大学生と同じ水準まで発達するのに対し、状況把握能力は、表情認知能力よりも発達がやや遅く、小学校５、６年生頃に急激に発達し、大学生と同じ水準まで発達することが示された。他方、一致課題による感情理解能力の発達は、学年とともに発達するのではなく、小学１年生から３年生にかけて得点が下がり、小学３年生から大学生になるにつれて得点が上昇するV字型の発達曲線を描くことが示された。

同様の結果は中村[24]でも示されている。中村[24]は、児童期の他者感情理解において、友人との関係性という文脈を利用した検討を行っている。実験では、児童が他者感情を推測する際に、他者との関係性と他者の個人的特性という文脈をどのように利用するかということについて検討を行っている（例えば、好きなものを仲が悪い人にもらう、嫌いなものを仲良しの人にもらう場合など）。社会的状況における他者の表情表出の理解、他者感情の推測、他者感情推測の根拠について児童期における発達的変化を検討した結果、それぞれにおいて児童期を通じて発達的変化があることが示され、１年生と６年生の間に有意差が見られ、３年生については有意差が見られなかったが、１年生と３年生が同じ水準にあるためではなく、３年生が他者感情推測の過渡期にあるためであると中村[24]は推測している。

発達的な変化が起こる要因として考えられるのは、児童期は幼児期と比べ、家庭に加

え、学校で過ごす時間が大きな割合を占めるようになることが考えられる。それに応じて家庭における親との関係に代わって、学校場面での友人、先生との関係が子どもにとって重要になってくる。井上・久保[28]は、他者感情理解能力の発達を基底する要因の１つとして、人とのやりとりという社会的な経験を挙げている。児童期の子どもは、先生や友人とのやり取りをスムーズに進めていくためにも、先生や友人の気持ちを理解した上で関わるということを日常的に行う機会が増えると思われる。また、学年が上がるにつれ、対人関係も複雑になっていく。そのため、表情認知能力だけではなく、状況把握能力による他者感情理解能力も上昇してくるのだと推測される。

２．他者感情理解能力と向社会的行動の関連

これまで、他者感情理解能力の発達に関する研究についてレビューしてきたが、他者感情理解の能力は、向社会的判断や向社会的行動と関連がある[18]。ゆえに、両者の関連について検討した研究についてもレビューを行う。

伊藤[18]の研究では、幼児（４～５歳児）を対象に検討を行っており、向社会的場面として、他者の状況と表情が一致した場面（例えば、悲しい場面での悲しい顔）と矛盾した場面（例えば、悲しい場面で微笑んでいる顔）を設定し、他者の適切な感情の推測と向社会的行動が密接に関連していること、表情と状況が矛盾した場面で、適切な感情統合に失敗しても、感情解釈情報の呈示によって、向社会的判断・行動が促進されることが示された。研究の問題点として、前述したように、他者感情解釈を役割取得能力（視点取得能力）の下位要素として捉えているが、用いられた課題は感情的視点取得能力であり、役割（視点）取得能力の下位要素になるとは言えず、役割（視点）取得能力の定義があいまいである点が問題である。

戸田[29]は、幼児（５～６歳）の他者感情理解能力と向社会的行動との関連について検討を行っている。他者感情理解能力については、渡辺・瀧口[20]を参考にした顔の表情認知のカード（イラスト：喜び、悲しみ、怒り、恐れ）を使用し、Freshbach＆Roe[30]や有馬[31]を参考に、喜び、悲しみ、怒り、恐れの感情を含んだ４つの例話と、その例話の内容を表現した３コマからなる図版を使用し、正しい表情の回答が得られるかについて得点化した（認知得点）。また、被験者が回答した例話の登場人物の表情認知に基づき、被験者が例話の主人公と同じ感情を共有している程度を情動得点として得点化した。認知得点と情動得点を合計したものを、感情認知得点とした結果、特に年長児においては、感情認知得点と向社会的行動の得点（社交性、支援、援助・課題達成）の関連がみられたが、感情抑制とは関連がみられなかった。

大対・松見[15]は、幼児（３歳～５歳児）の役割（視点）取得能力（認知的・概念的視点取得と感情的視点取得の２種類）と感情表出の統制、および対人問題解決と社会的スキルについて検討している。感情的視点取得能力課題としては、クッキーが好きなパペットAがクッキーの嫌いなパペットBを家に招待し、パペットAが母親と一緒にパペットBのために一生懸命作ったおやつを出すという話を呈示し、同じ「クッキーがおやつに出る」という場面において、クッキーが好きなパペットAと嫌いなパペットBとでは、生起する感情が違うということを子どもが理解できるかどうかを検討するため、「クッキーがおやつに出る」場面でのパペットA、Bがそれぞれどのように感じているか、またその理由について自由に回答させ、嬉しい顔、悲しい顔、怒った顔の３つが描かれた表情図の中からパペットA、Bがするであろう表情を回答させている。結果として、役割（視点）取得能力は感情表出の統制を媒介して、対人問題解決能力を予測することが明らかになったが、大対・松見[15]

の研究の問題点として、認知的・概念的視点取得と感情的視点取得を１つにまとめて「役割（視点）取得能力」として他変数との関連について、分析を行っている点にある。厳密に言えば両者は異なる能力であるので、別々のまま分析に用いるべきであり、そうすることにより、より明確に何が向社会的行動の下位能力となるかについて検討できたと思われる。

山田・神山[32]は、他者感情理解能力と社会的スキルについて、小学校３～６年生を対象に検討を行っている。課題としては、表情課題（表情の絵を見せて、設定した感情について、理解できているかについてを５段階で評定）、状況課題（表情なしの４コマ漫画を見せて、設定した感情について理解できているかどうかを５段階で評定）、表情＋状況課題（４コマ漫画と物語に対して適切と考えられる表情の絵を使用し、設定した感情について理解できているかどうかについて６段階で評定）であった。なお、設定した感情とは、照れ、罪悪感、羨ましさの複雑感情であった。結果として、社会的スキルの中で、引っ込み思案因子が高い児童は他者感情理解能力があり、特に高学年では、状況課題の得点が引っ込み思案因子が高い児童の方が、有意に高い得点を示していた。このことから、引っ込み思案児は、社会的スキルが欠けていると捉えられやすいが、むしろ周りの児童よりも他者の感情を適切に理解しているとは考察している。

山村ら[33]は、幼児（５歳～６歳）における実行機能と他者感情理解能力および共感性との関連を検討している。他者感情理解能力については森野[34]の課題を参考に、喜び、悲しみ、怒り、恐れの感情が喚起する物語（状況情報のみ４場面、状況と主人公特性情報２場面）を用い、上記４種類の感情を示す表情と、ニュートラルな表情が描かれたカードが用意され、他者感情理解（状況）、他者感情理解（状況+特性）、共感性、抑制機能、ワーキングメモリー、認知の柔軟性、言語能力について検討され、他者感情理解（状況）は他者感情理解（状況+特性）、共感性、ワーキングメモリー、認知の柔軟性、言語能力に関連があることが示され、他者感情理解（状況+特性）については、他者感情理解（状況）、共感性、ワーキングメモリー、言語能力との関連が示された。他者感情理解（状況）と他者感情理解（状況+特性）との相違点として、認知の柔軟性とは関連がみられなかった。他者の置かれている状況に関する認知ができる方が、認知の柔軟性と関連があるのだろう。 さらに、山村ら[35]は、同様の手続きで幼児（５歳～６歳）における実行機能と他者感情理解、保育者評定における実行機能について検討を行い、山村ら[33]と同様に、他者感情理解（状況+特性）が実行機能の中で、認知の柔軟性とワーキングメモリーが関連があることを示している。

また、近年では、他者感情理解と「心の理論」との関係が検討されている。「心の理論」とは、自己および他者に目的・意図・知識・信念・思考・概念・推測・ふり・好みなどの直接観察できない心的状態を帰属させることであり[36]、誤信念課題を用いて測定されている。代表的な誤信念課題には、サリーとアンの課題[37]、スマーティ－課題[38]がある。

東山[39]は、幼稚園児（４、５歳児）に対し誤信念課題と他者感情理解課題との関連を検討している。「心の理論」課題としては、サリーとアンの課題、スマーティー課題、絵画配列テスト、他者感情理解課題としては、表情写真課題、感情理解課題を行った。結果として、いずれの誤信念課題と他者感情理解課題との間で関連はみられなかった。

森野[34]も保育園児（４歳～６歳児）について誤信念課題と他者感情理解能力について検討を行っている。他者感情理解能力については、笹屋[21]、Lazarus[40]、渡辺・瀧口[20]に基づく状況

情報のみを利用する感情理解課題、朝生[23]や平林・柏木[41]に基づく状況情報と特性情報の両方を利用する感情理解課題の２つを用いて検討しており、心の理論と他者感情理解能力については比較的強い相関（ｒ＝.60）が認められた。

東山[39]の表情写真課題については、感情的視点取得能力課題であり（感情理解課題については、測定法が書かれていないため、判断できなかった）森野[34]の感情理解の課題も、「ほとんどの人と同じ感情を主人公も感じる話、参加者とは違う感情を主人公が感じる話」であり、感情的視点取得能力課題と考えられる。

これらの研究のレビューから、他者感情理解能力については、いずれも感情的視点取得能力について測定している。その中でも、表情認知よりも状況把握能力が向社会的行動と関連があることが示されており、向社会的行動との関連を検討する場合の重要な要因となると言える。

Ⅲ　まとめ

以上、他者感情理解能力課題と、感情的視点取得能力測定課題について、幼児期・児童期に焦点をあて、これまでなされてきた研究についてレビューを行った。その結果、他者感情理解能力測定課題のうち、表情認知課題において「表情のみ」を呈示し、それに対して一致する感情について言及させたりというラベリング課題や、感情語を呈示し、それにマッチする表情を回答させるマッチング課題については、感情的視点取得能力を測定する課題とは異なるものであると考えられた。他方、他者感情理解能力としていても、物語等を提示し、主人公の状況や特性から感じている感情を推測させる課題は、「他者の経験している感情を正しく読み取る、あるいは推測する能力」[9]について測定していること、また、主人公の状況や特性の「立場に立って」考えることのできる能力＝「役割（視点）取得能力」を必要とするため、感情的視点取得能力について測定していると考えられる。今後は両者を明確に区別して定義した上で、測定する必要があろう。

その際、感情的視点取得能力測定にあたり考慮すべき点として、刺激の質、提示される物語の内容を挙げることができる。表情刺激に写真を用いた笹屋[21]と、表情の特徴を端的に示している線画の刺激を用いた山田[22]では結果が異なり、笹屋[21]では、表情と状況の2つの手がかりがある方が感情理解が容易であるのに対し、山田[22]では、表情刺激のみの方が感情理解の得点が高かった。このことについて山田[22]は、表情写真よりも、表情の特徴を端的に示している線画の刺激の方が、写真による刺激よりも感情の理解が容易であったため、表情課題の得点が高くなったのだと考察している。

提示される感情の内容については、山田[22]では、状況把握課題における怒り感情の回答では、誤回答のほとんどが「悲しみ」に関する記述であり、小学校中学年までの児童は、怒りと悲しみの区別が困難であることが示唆された。怒りと悲しみを区別する条件には、１）その出来事が故意であったかどうか、２）その出来事の結果、喪失状態になったかどうか、嫌悪状態になったか、３）その出来事が回復可能かどうかの３条件があるとされているが[42]、児童期においては、その中でも回復可能性が重要な基準となる[43]。回復可能性については、自己の信念によるため、小学校低・中学年の児童にとっては、回復可能性のある場面でも、回復不可能な場面として認識される可能性を山田[22]は述べている。

今後の課題としては、４つある役割（視点）取得能力についての定義について明確にした上で、何が向社会的行動の先行要因となるか、検討する必要があると考えられる。

付記

本研究は、2012年度新潟青陵大学共同研究費助成を受けた上で行われた。

引用文献

1）文部科学省．平成21年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査．<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/08/1296216.htm>. 2012.6.14.

2）Eisenberg, N. Altruistic emotion, cognition, and behavior. 102-106. Hillsdale, NJ：Lawrence Erlbaum Associates；1986.

3）Eisenberg, N. &Fabes, R.A. Prosocial development. In N.Eisenberg（Ed.）, Handbook of child psychology：vol.3. social, emotional, and personality development（5th ed.,701-778）. New York：Wiley；1998.

4）Selman, R.L. Social-Cognitive Understanding. In Lickona, T.（Ed.）, Moral development and behavior. 299-316. Newyork：Holt；1976.

5）Piaget, J. & Inhelder, B. The child conception of space. 3-43 . New York：Norton；1967.

6）Flavell, J. H., Evertt, B.A., Croft, K., & Flavell, E.R. Young children's knowledge about visual perception：Further evidence for the Level1-Level2 distinction. Developmental Psychology. 1981；17：99-103.78-83.

7）Borke, H. Interpersonal perception of young children：Egocentrism or empathy? Developmental Psychology. 1971；5：263-269.

8）Borke, H. The development of empathy in Chinese and American children between three and six years of age：A cross-culture study. Developmental Psychology. 1973；9：102 -108.

9）Davis,M, H. Empathy：A Social Psychological Approach.Madison, WL：Brown&Benchmark；1994.（ディヴィス, M.H. 菊池章夫訳．共感の社会心理学．55-61．東京：川島書店；1999.）

10）Chandler, M.J & Greenspan, S. Easartz egocentrism：A reply to H. Broke. Developmental Psychology. 1972；7：104-106.

11）Garner, P. W. The rlations of emotional role taking, affective/moral attributions, and emotional display rule knowledge to low-income schoolage children's social competence. Journal of Applied Developmental Psychology. 1996；17：19-36.

12）Garner, P. W. Continuity in emotion knowledge from preschool to middle-childhood and relation to emotion socialization. Motivation and Emotion. 1999；23(4)：247-266.

13）Flavell, J.H., Botkin, P.T., Fry, C.L., Wright,J. W. & Jarvis, P.E. The development of role-taking and communication skills in children. 160-183. New York：Wiley；1968.

14）Dunn, J. & Cutting, A.L. Understanding others, and individual differences in friendship interactions in young children. Social Development. 1999；8：201-219.

15）大対香奈子、松見淳子．幼児の他者視点取得、感情表出の統制、および対人問題解決から予測される幼児の社会的スキルの評価．社会心理学研究．2007；22(3)：223-233.

16）荒木紀幸．社会的視点取得の研究，ロバート・セルマン．大西文行編．道徳性心理学．173-190．京都：北大路書房；1991.

17）荒木紀幸．役割取得検査マニュアル．福岡：トーヨーフィジカル；1988.

18）伊藤順子．幼児の向社会的行動における他者の感情解釈の役割．発達心理学研究．1997；8(2)：111-120.

19）いずれも同義の内容を指すことから、本論文では「他者感情理解能力」、「他者感情解釈能力」、「他者感情推測能力」について、３つまとめて「他者感情理解能力」と定義する。

20）渡辺弥生、瀧口ちひろ．幼児の共感と母親の共感との関係.教育心理学研究．1986；34：36-43.

21）笹屋里絵．表情および状況手掛りからの他者

感情推測．教育心理学研究．1997；45：312-319.
22）山田洋平．児童期における表情および状況手掛りからの感情理解能力の発達．ピア・サポート研究．2010；7：11-18.
23）朝生あけみ．幼児期における他者感情推測能力の発達－利用情報の変化－．教育心理学研究．1987；35(1)：33-40.
24）中村真樹．児童期における他者感情推測能力の発達．九州大学心理学研究．2006；7：45-52.
25）Gnepp J. & Chilamkurti, C. Children's use of personality attributions to predict other people's emotional and behavioral reactions. Child Development．1988；59(3)：743-754.
26）Gnepp J. Children's social sensitivity：Infering emotions from conflicting cues. Developmental Psychology．1983；19：805-814.
27）久保ゆかり．幼児における矛盾する出来事のエピソードの構成による理解．教育心理学研究．1982；30(3)：239-243.
28）井上健治、久保ゆかり．他者理解の発達．子どもの社会的発達．112-130．東京：東京大学出版会；1998.
29）戸田須恵子．幼児の他者感情理解と向社会的行動との関係について.北海道教育大学釧路校研究紀要．2003；35：95-105.
30）Freshback, N.D. & Roe, K. Empathy in six and seven-years-olds. Child Development. 1968；39：133-145.
31）有馬比呂志．幼児の共感性に関する研究―４つの感情条件における共感反応－．広島文教女子大学紀要．1993；28：105-114.
32）山田洋平．神山貴弥.感情理解能力と社会的スキルとの関連.日本教育心理学会総会発表論文集．2009；51：647.
33）山村麻予、辻本耐、中谷素之．幼児期における実行機能と他者感情理解および共感性との関連．日本教育心理学会総会発表論文集．2009；51：535.
34）森野美央．幼児期における心の理論発達の個人差、感情理解発達の個人差、及び仲間との相互関係の関連．2005；16(1)：36－45.
35）山村麻予、辻本耐、中谷素之．幼児期における実行機能と他者感情理解の関連性．大阪大学教育学年報．2011；16：59-71.
36）Premack, D., & Woodruff, G. “Does the chimpanzee have a theory of mind?” The Behavioral and Brain Sciences. 1978；1(4)：515-526.
37）Baron-Cohen, S., Leslie, A.M., & Frith, U. Does theautistic child have a ‘theory of mind’? Cognition. 1985；21：37-46.
38）Hogrefe, G. J., Wimmer, H., & Perner, J. Ignorance versus false belief：A developmental lag inattribution of epistemic states. Child Development. 1986；57：567-582.
39）東山薫．誤信念課題は幼児の感情理解能力を予測するのか？日本教育心理学会総会発表論文集．2002；44：118.
40）Lazarus, R.S. Emotion and adaptation. 171-213. New York：Oxford University Press；1991.
41）平林秀美、柏木恵子．他者の感情を推論する能力の発達．発達研究．1990；6：71-85.
42）Levine, L.J. Young children’s understanding of the causes of anger and sadness. Child Development. 1995；66：697-709.
43）塙朋子、小松孝至．児童期における情動経験－怒り、悲しみ、喜び、恥の比較と発達的変・性差の検討－．東京大学大学院教育学研究科紀要. 1999；39：301-312.